1992.5.　　No. 1

ニューズレター

日本霊長類学会・霊長類保護委員会

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

目　次

ニューズレターの発行にあたり・・・・・・・・・・・・ 2

サル類の実験利用に関する現状と問題点・・・・・・・ 3

ワシントン条約締約会議に参加して・・・・・・・・・ 6

自然保護特別活動費の使途について・・・・・・・・・ 7

特集「金華山のサル」・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

最新情報あれこれ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

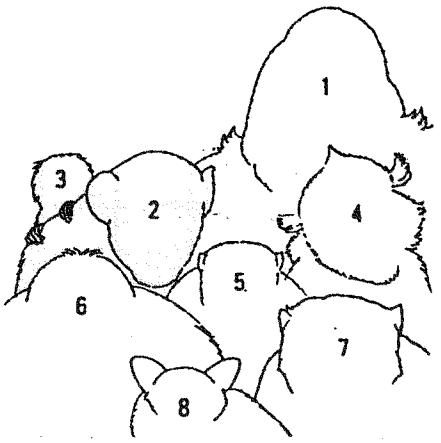
保護委員会からのお願い・・・・・・・・・・・・・・・ 12

ニューズレター発行にあたり

日本霊長類学会保護委員会からニューズレターを発行することになりました。日本だけでなく世界の各地で霊長類の保護・管理が大きな問題となっています。霊長類の野外研究や実験室での研究に携わっている研究者たちがともに、この問題に強い関心をいだき、方策を見いだしてゆかねばなりません。このニューズレターを通して、霊長類の保護・管理に関する情報が広く知れわたり、様々な方面から霊長類に関わる人々がそれぞれ考え、議論し、行動するきっかけになることを望みます。特に、ニホンザルの問題は急を要する大きな問題であり、皆様の協力が不可欠です。

ニューズレターに掲載する内容は、霊長類の保護・管理などに関する多様な話題を含みます。最新の情報を掲載することが重要だと思いますので、皆さんからの積極的な情報や原稿の提供をお願いします。皆さんから提供された情報や原稿、さらに保護委員が収集した資料を基にして、保護委員会で編集し、ニューズレターを発行します。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊



裏表紙の説明

1. ゴリラ
2. チンパンジー
3. ライオンタマリン
4. キンシコウ
5. ウーリークモザル
6. オランウータン
7. ニホンザル
8. アイアイ

サル類の実験利用に関する現状と問題点

松林清明・後藤俊二（京大・霊長研）

1、外国産サルの輸入

従来、実験目的に輸入されるサル類の中心はアカゲザルであったが、インドの輸出禁止措置（1977年）以来、このサルの主な輸出国はほゞ中国のみとなり、頭数の制限と価格の上昇により、本種の輸入・使用は大巾に減少している。代って現在の主流をなしているのがカニクイザルである。世界規模で年間2000～3000頭と推定されるカニクイザルが実験目的で輸入されている。ところが1990年に東南アジア産のカニクイザルよりエボラ出血熱様ウィルスがアメリカで検出され、大きな問題になった。以前よりＢウィルス抗体保有率が高いことなど野生由来カニクイザルには衛生上の問題点がいくつか指摘されていたが、この件を機に輸入カニクイザルの質に関する関心が急速に高まることになった。その結果、野生サルの直接輸入でなく、繁殖施設で生産した育成ザルを購入する動きが活発となってきた。価格は無論高いが、総合的に考えると結局安くつくとみなされるのであろう。現在日本の企業が直接あるいは間接に経営しているサル繁殖施設がフィリピン１か所とインドネシアに２ケ所あり、更にモーリシャスの繁殖施設からの輸入も行われている。このような傾向は今後も継続するものと思われるが、日本の主要なサル需要家である製薬企業の意図するしないにかゝわらず、こういう動きは結果的に野生カニクイザルの生息数減少のスピードを緩やかにする効果を持つであろう。

2、動物福祉への国内の取り組みの状況

サル類の実験利用に際して、苦痛などのストレスをなるべく除くような配慮は、この4～5年急速に学界の関心を惹くようになった。

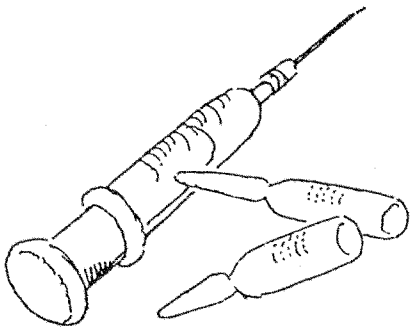
動物実験に際しての指針作りを文部省が指導したためもあるが、研究論文の投稿の時に、準拠したガイドラインの明示を求める学術雑誌が増加したことも影響している。現在、医学部では国公立大学の全て、私立大学ではその大部分が各自の指針を作成済みかもしくは準備中である。

指針の内容は多様であり、不適切な実験計画は不許可にするものから、努力目標として掲げているに過ぎないものもある。今後内容的に洗練され、強化される方向に向かうであろう。

問題は、動物実験を大規模に実施している製薬企業の側の不透明さである。企業秘密の壁に阻まれて、その内部事情は公けにされにくく、動物倫理に関する取り組みは不明である。

3、日本実験動物学会の指針について

実験動物および動物実験に関する科学を扱う日本実験動物学会は1987年に、学会としての「動物実験に関する指針」を作成した。これは各大学等での指針作成に際しての参考資料となるように意図されたもので、概括的な方向づけを示している。更に1991年に同学会はこの指針に関する解説を出し、その中で野生ニホンザルの実験利用に際して注意を促している。この精神を生かす為に日本霊長類学会の積極的な対応が必要である。



4、不用イヌ・ネコの取り扱いについて

従来、都道府県は、各市町村役場あるいは保健所等で引き取ったり捕獲したイヌ・ネコの一部を、大学等の研究機関へ実験用に譲渡していた。ところがこの事業について動物愛護団体からの反発が強まったために、見直しの気運が高まり、既に東京都や兵庫県などは譲渡中止の方針を打ち出すに至った。この動きは早晩全国へ波及することが予想され、これまで不用引き取りイヌ・ネコを安価な実験動物として依存していた各大学の医学部等では対策に頭を痛めている。「飼い主に見放されて既に大きな精神的打撃を受けた動物に、更に生体実験による苦痛を与えるべきではない」という理由は、ペット以外の動物にも当てはまる可能性がある。即ち有害鳥獣駆除の目的で市町村が捕獲した野生ニホンザルの実験使用にも、将来制約がかゝることが充分考えられる。彼らも自然生息域と群の仲間から切り離され、狭いケージに収容されることで極めて大きな苦痛を受けているとみなされるからである。従来「研究面での有効利用」という名目が、サルの捕獲を精神的・物理的に支えてきたのは事実である。それが、利用の面から歯止めがかゝることになれば、この問題に大きな変化が生じるきっかけとなろう。その時がニホンザルの種保全にとって"既に遅すぎた"時期でなければ良いのだが‥‥。

参考文献

1. 動物実験に関する指針解説。（1991），（社）日本実験動物学会編，ソフトサイエンス社
2. 動物実験に関する指針。（1987），（社）日本実験動物学会，実験動物，36（3）：285-288

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ワシントン条約締約会議に参加して

1992年2月に京都で開催されたワシントン条約締約会議に、京都大学霊長類研究所がＮＧＯ（非政府組織）として参加した。今度の会議の重要議題は「象牙」と「マグロ」であり、霊長類が話題にのぼることはほとんどなかった。しかし、会議開催期間中には、公式の会議だけではなく、様々な非公式の集まりがもたれており、霊長類保護委員会では、そのような集まりの１つにおいて、ニホンザルの現状を報告した。同時に、「Japanese Monkeys for Tommorow?」と題した７ページ程の英文のパンフレットも配布した。パンフレットには、ニホンザルが抱える様々な問題（例えば、下図のような資料）や日本における動物実験のガイドラインなどを要約してある。このパンフレットの文面は、さらに書き直して、「Asian Primates」に投稿する。

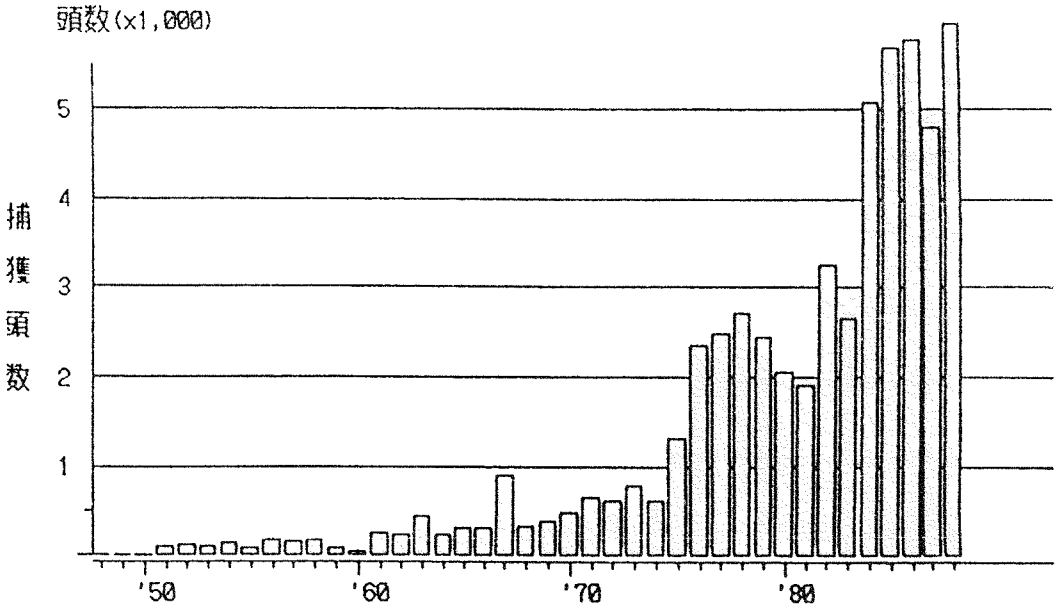


図　ニホンザルの捕獲頭数の継年変化

学会特別基金・自然保護活動費（1991年度）の使途について

「２０万円を、金華山調査小屋建設の基金に拠出する。」

理由：金華山のニホンザル研究は過去10年近く継続され、人づけされた自然群を継続的に観察している貴重なフィールドである。その中断を防ぎ、調査保護活動を今後も安心して円滑に進めるための調査小屋建設計画に、学会として資金協力することは、特に北日本の冷温帯の森林に生息するニホンザルの研究・保護にとって重要であると評価できるため。また、「宮城のサル調査会」は、その目的を達成する能力を有すると評価できるため。

1992年3月23日に開かれた日本霊長類学会理事会において、上記の提案は承認されました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

金華山のニホンザル　－現状とこれからの課題－

伊沢紘生（宮城教育大学）

１．島の自然とサルの研究

金華山は宮城県牡鹿半島から約700m離れた、湾上に浮かぶ南北 5.1Km、東西3.7Km、標高445mの島で、面積は約10Km^2 である。

島の大部分は、ブナを中心にシデ、ハンノキ、ナラ、ケヤキなどの落葉広葉樹と、モミ、アカマツ、カヤなどの針葉樹の混成した自然林でおおわれている。島の植生が現在もなお自然の姿をとどめているのは、島のおよそ９０％を占める国有林が特別保護地区および第１種特別地域として保護されてきたことと、残り10％の金華山黄金山神社の社有林が霊山として保護されてきたことによるところが大きい。居住者はいない。

現在この島には５群（Ａ、B_1、B_2、Ｃ、Ｄ群）、約270頭のサルが生息している（図を参照）。これらの群れを対象に、1982年以来、宮城教育大学伊沢研究室（29合同研究員）が中心になって継続調査をおこなってきた。グループ・ワークの主なテーマは、５群のハビチュエーションと個体識別、個体数と遊動域の変動、出生率・死亡率の年変動と植物生産量との関係、オスの移出入を中心とした群れの社会変動などである。

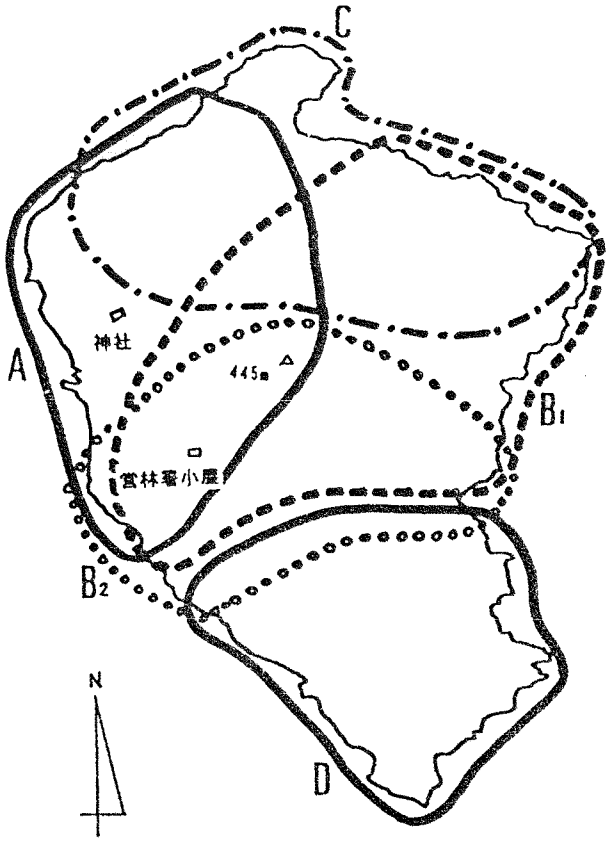


図　金華山に生息する５群の主な利用地域

それ以外に何人もの研究者がそれぞれのテーマで長期調査を行ってきた。例えば、Ａ群を対象にした佐藤静恵（山形大、以下いずれも調査当時）のグルーミングの季節変動とその要因の研究、中川尚史、橋本千絵、田中香（京大、霊長研）それぞれの採食生態に関する研究、大野史人（東北大）の発達の研究、B_1 群を対象にした高橋ちさと（宮教大）のオトナオスの社会関係の研究、B_2 群を対象にした斉藤千映美（東大）の採食生態の研究、そのほか庄司由美子、佐藤和恵（宮教大）のみなし子の発達の研究、川端恵理子（宮教大）のオスグループの研究などがある。これらの調査によって、現在までにＡ、B_1、B_2群については個体識別と家系図の作成が完了している。

２．サル研究フィールドとしての利点

金華山にはサル以外にニホンジカが高密度（現在約500頭）に生息している。その食圧で亜高木層や低木層があまり発達しておらず、森林の世代交代の面や

草原化の問題を抱えてはいる。ただ、野生のサルの調査という点に限ってみれば、四季を問わず、一年中森の中は透けて見通しがよく、そのためどの時期をとってもインテンシブな調査が可能であり、それが他地域と比べて際立った有利な点といえるだろう。各群れの遊動域がせいぜい 2Km^2 と狭いことも有利な条件だ。何よりも猿害問題がなく研究に没頭できる点は特筆されてよい。

島は生態学的には閉鎖系である。だから金華山のサルの研究に島しょ性の問題は避けて通れないが、その一方で、オスが外から入ってきたり、出ていくことがないという点でオスの生活史を研究するのには格好のフィールドだろうし、10Km^2 の中に５群が遊動域を著しく重複させて生息していることから群間関係の詳細な研究も可能だろう。まださまざまな研究テーマが他に考えられるが、研究の進んでいる亜熱帯植生の屋久島のニホンザルとの比較研究も興味深い点だ。

このように、金華山は全国の野生ニホンザル生息地の中で、森林の伐採などの人為的環境改変の問題がほとんどなく、猿害など住民との摩擦も全くなく、彼らの生と死のすべてが自然に委ねられているという点で、今後の日本のサル学にとって、きわめて貴重かつ重要なフィールドであることはまちがいない。

３．保護と調査小屋の建設

だからこそ、島の自然の保護に、私たちは多大な関心を持ち、努力を傾注していく必要も同時にあるだろう。その一番の方法は、より多くの研究者（学生や関係者も含め）がこれからも島のサルの調査・研究や教育的利用に継続的に関わっていくことである。

現在、島には宿泊施設として、金華山黄金山神社が経営する参拝者及び一般客のための参集殿とユースホステル、及び、民宿２軒がある。宮教大グループが調査を開始した当初はもっぱらユースホステルを利用していた。しかし、長期調査になるとかなりの出費がかさむ。そこで、1985年からは島にある石巻営林署作業員宿舎を営林署の好意で長期借用し、そこを調査基地としてきた。ただ老朽化が著しいこともあって、営林署（及び青森営林局）は1992年1月末日を目度に取り壊すことを決定した。

本土から隔離され船の便しかない環境では、調査のための宿泊施設は必要不

可欠である。現在、私たちは営林署小屋の取り壊しの延長と継続使用の許可を一方で得ながら、もう一方で地元牡鹿町及び牡鹿町教育委員会と相談し、新しい調査小屋建設をめざしている。そして、昨年11月以来広く全国の研究者、教育関係者、ジャーナリスト、及び、宮城県下の一般市民に呼びかけて、調査小屋建設のための基金の募金活動をおこなっているし、基金集めのパーティも仙台と石巻で開催した。その結果、多くの方々の協力を得て、ほぼ当初の予定通りの300万円が現在までに集まっている。この春か遅くとも夏を目度に建設を考えている調査小屋の建設費用は約1000万円である（資材運搬費や諸設備費を除く）。私たちは今後、上記基金と募金協力者リストをもとに、企業等に寄付を働きかけていく予定である（この紙面を借りて、さらなる基金への協力をお願いしたい。郵便振替口座：仙台3-26443　宮城のサル調査会　宛）。

4．スーパーネイチャリングセンター構想

もちろんこの調査小屋の建設は、単にサルの研究のみならず、シカや豊富な野鳥、植生その他金華山の自然に関わる一切の調査・研究活動を将来にわたって保証するためのものである。そしてこのような活動を通して得られた成果は、そのまま自然の持つ教育力の発掘に直結するはずであるし、自然保護や環境保護の必要性が強く叫ばれている現在、その教育力を学校教育や社会教育に積極的かつ有効に利用しない手はないと私たちは考えている。そのための構想「スーパーネイチャリングセンター」を目下、宮教大グループを中心に鋭意練っている最中であり、この構想（ＳＮＣ構想）の内容に関する諸研究も本年度から金華山を舞台に展開されることになっている。

ここではＳＮＣ構想を詳しく紹介するだけの紙面の余裕がないが、この構想の実現を通して、島の自然の保護に、明確な将来の展望が開けてくることだけはまちがいない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

最新情報あれこれ

☆　世界銀行の資金援助にもとずく、コンゴ、ドキヌアバレ保護区での調査研究活動の基本方針の検討会が、京都・アフリカ研究センターで、1992年1月20日に開かれた。1992年6月からの５ヶ年計画の予定である。

☆　ボノボ（ピグミーチンパンジー）が日本モンキーセンターからベルギーのアントワープ動物園へ送られた（1992年2月）

☆　京都大学霊長類研究所の鈴木晃氏に、ボルネオ島での調査資金500万円援助を目標とした、オランウータン・エイドの募集したイラスト大賞の発表があった（朝日新聞、青鉛筆より）。

☆　下北地方文化財審議委員連絡協議会は、青森県に対し、タイワンザルとの交雑を防ぐための条例制定を要請した（東奥日報、1991,5,15）。また、ダム建設に批判の声があがっていることが報道されている（河北新報、1991,5,13）。

☆　金絲猴のオスメス１ペアが神戸市の王子動物園で１年間飼育され、動物行動学や繁殖整理学などの側面から研究される。これは、金絲猴を絶滅の危機から救うために行われる、中国・天津市、中国野生動物保護協会との協同研究。1992年5月22日から一般公開もされる（朝日新聞、1992,2,22；1992,5,18）

☆　1991年秋から京都市伏見区と宇治市に出没し人を咬んでいたニホンザルが捕獲された（朝日新聞、1992,3,19）

【保護委員会からのお願い】

「絵はがき」と「テレフォンカード」販売のお願い

ご存知のように、霊長類学会では自然保護のための活動資金として、サルの絵はがき及びテレフォンカードの販売を行っています。しかし、残念なことに学会内だけでの販売では、収益が頭打ち状態になっています。そこで、販路を拡大すべく、学生・教職員はじめ一般の方々へ販売できる見込みのおありになる学会員の皆様に、物品の販売に御協力をお願いする次第です。協力を申し出て頂いた方には、物品とともにこの募金の目的および使途を明示したパンフレットをお送り致します。なお、大学等、組織内での募金活動に過敏な組織もあるかとは思いますので、そのあたりは十分御注意下さい。

以前は買い取って頂くという形でお願いしたことがありましたが、協力者が少なかったため、今回は後払いでもかまわないということに致します。ただし、少なくとも各年度末には販売状況をお知らせ頂くとともに、売上げ金を送金して頂くことになろうかと思います。

なお、1992年2月末日現在の物品の残数は以下の通りです。

絵はがき（1セット4枚組、400円）：原猿　182セット；マカク　164セット
ニホンザル　88セット；類人猿　74セット。

テレフォンカード（50度　800円）：ボノボ　53枚。

多くの学会員の皆様の御協力を、お待ち致しております。物品販売のご協力に関するお問い合わせは、シオン短期大学　中川尚史（自然保護幹事）まで。

連絡先：〒319-12　茨城県日立市大みか町6-11-1　シオン短期大学
TEL: 0294(52)3215;　FAX: 0294(52)3343

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

サルに関係した情報を収集しています。

霊長類に関する情報を集めております。特に、ニホンザルについては新聞記事などによく取り上げられております。しかし、多くの記事は地方紙や地方版に掲載されるために、なかなか皆が知るところとはなりません。猿害なども含めて、広くサルの情報を集めております。新聞記事のコピー等を霊長類保護委員までお送り下ださるようお願い申し上げます。

霊長類保護委員会メンバー

糸魚川直祐*　吹田市山田丘１－２　大阪大学人間科学部
TEL 06-877-5111(ex 6340)　FAX 06 878 1032

松林清明*　犬山市官林　京都大学霊長類研究所
TEL 0568-61-2891　FAX 0568-62-2428

丸橋珠樹*　東京都練馬区豊玉上１－２６武蔵大学人文学部
TEL 03-3991-1191　FAX 03-3991-2763

後藤俊二**　犬山市官林　京都大学霊長類研究所
TEL 0568-61-2891　FAX 0568-62-2428

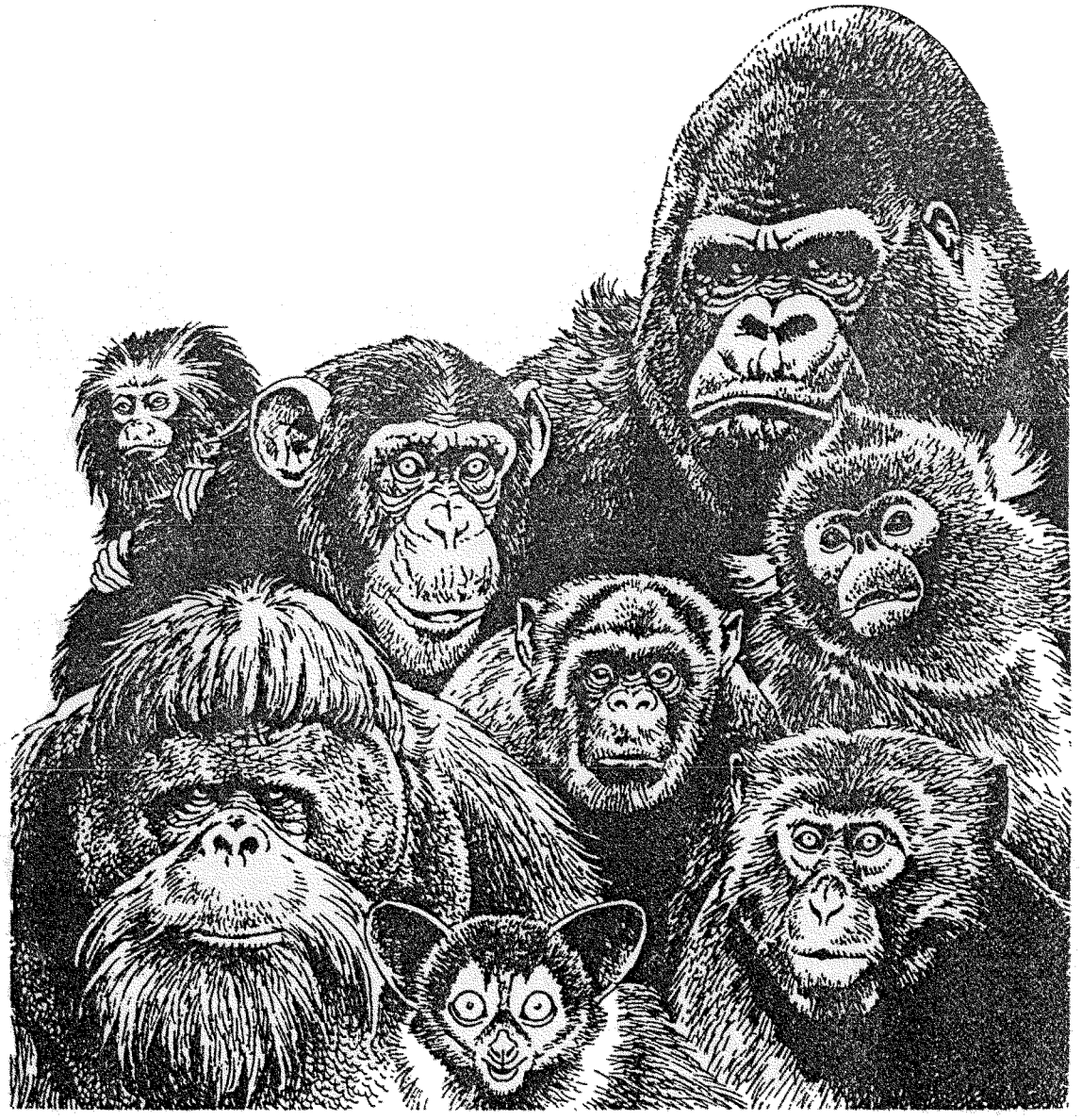
中川尚史**　茨城県日立市大みか町6-11-1　シオン短期大学
TEL: 0294(52)3215　FAX 0294(52)3343

D. スプレイグ**　京都市左京区北白川追分町　京都大学理学部動物学
TEL 075-753-4085　FAX 075-751-6149

中道正之**　吹田市山田丘１－２　大阪大学人間科学部
TEL 06-877-5111(ex 6342)　FAX 06 878 1032

*　自然保護担当理事　　**　自然保護担当幹事

日本霊長類学会霊長類保護委員会
三菱銀行武蔵境支店　普通預金口座　４８１６３４１



【このニューズレターは再生紙を使用しております】